

国

語

(  
解答番号

1

}

37

(

## 第1問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

わたしは思い出す。しばらく前に訪れた高齢者用のグループホームのことを。<sup>(注1)</sup>

住むひとのいなくなった木造の民家をほとんど改修もせずに使う<sup>(注2)</sup>デイ・サーヴィスの施設だった。もちろん「バリアフリー」か

らはほど遠い。玄関の前には石段があり、玄関の戸を引くと、玄関間がある。靴を脱いで、よいしょと家上がると、こんどは襖<sup>ふすま</sup>。それを開けてみなが集<sup>つど</sup>っている居間に入る。軽い「認知症」を患っているその女性は、お菓子を前におしゃべりに興じている

老人たちの輪にすぐには入れず、呆然<sup>ぼうぜん</sup>と立ちつくす。が、なんとなくいたたまれず腰を折ってしゃがみかける。とつさに「どうぞ<sup>(注3)</sup>と、いざりながら、じぶんが使っていた座布団を差しだす手が伸びる。「おかまいなく」と座布団を押し戻し、「何言<sup>(注4)</sup>うておすな。遠慮せんといっしょにお座りやす」とふたたび座布団が押し戻される……。

和室の居間で立ったままであることは「不自然」であるのは、いうまでもなく、人体にとってではない。居間という空間においてである。居間という空間がもつめる<sup>(ア)</sup>キョソの「風」に、立ったままであることは合わない。高みから他のひとたちを見下ろすことは「風」に反する。だから、いたたまれなくなって、腰を下ろす。これはからだで憶<sup>おぼ</sup>えているふるまいである。からだはひとりでにそんなふうに動いてしまう。

A からだが家のなかにある、というのはそういうことだ。からだの動きが、空間との関係で、ということは同じくそこにいる他のひとびととの関係で、ある形に整えられているということだ。

「バリアフリー」に作られた空間ではそうはいかない。人体の運動に合わせたこの抽象的な空間では、からだは空間の内部にあるながらその空間の〈外〉にある。からだはその空間にまだ住み込んでいない。そしてそこになじみ、そこに住みつくというのは、これまでからだが憶えてきたキョソを忘れ去るということだ。ただつばろい空間にあつて立ちつくしていても「不自然」でないような感覚がからだを侵蝕<sup>しんしょく</sup>してゆくということだ。単独の人体がただ物理的に空間の内部にあるということがまるで自明であるかのように。こうして、さまざまなるまいをまとめあげた「暮らし」というものが、人体から脱落してゆく。

心ある介護スタッフは、入所者がこれまでの「暮らし」のなかで使いなれた茶碗や箸を施設にもつてくるよう「指導」する。洗う側からすれば、割れやすい陶器製の茶碗より施設が供するプラスチックのコップのほうがいいに決まっているが、それでも使いたれた茶碗を奨める。割れやすいからいいに持つ、つまり、身体ふるまいに気をやる機会を増すことで「痴呆」の進行を抑えるということももちろんあろう。が、それ以上に、身体を孤立させないという配慮がそこにはある。

停電のときでも身の回りのほとんどの物に手を届けることができるように、からだは物に身をもたせかけている。からだは物の場所にまでいつも出かけていつている。物との関係が切断されれば、身は宙に浮いてしまう。新しい空間で高齢者が転びやすいのは、比喩ではなく、まさに身が宙に浮いてしまうからである。まわりの空間への手がかりが奪われているからである。「バリアフリー」で楽だとおもうのは、あくまで介護する側の視点である。まわりの空間への手がかりがあつて、他の身体——それは、たえず動く不安定なものだ——との丁々発止のやりとりもはじめて可能になる。とすれば、人体の運動に対応づけられた空間では、他のひととの関係もぎくしゃくしてくることになる。あるいは、物とのより滑らかな関係に意を配るがために、他者に関心を寄せる余裕もなくなってくる。そう、たがいに「見られ、聴かれる」という関係がこれまで以上に成り立ちにくくなる。空間が、いつてみれば、「中身」を失う……。

### X「中身」?

この言葉をいきいきと用いた建築論がある。青木淳の『原っぱと遊園地』(王国社、二〇〇四年)だ。青木によれば、「遊園地」が「あらかじめそこで行われることがわかつている建築」だとすれば、「原っぱ」とは、そこでおこなわれることが空間の「中身」を創つてゆく場所のことだ。原っぱでは、子どもたちはとにかくそこへ行つて、それから何をして遊ぶか決める。そこでは、たまたま居合わせた子どもたちの行為の糸がたがいに絡まりあい、縋りあわされるなかで、空間の「中身」が形をもち始める。その絡まりや縋りあわせをデザインするのが、巧い遊び手のわざだということであらう。

青木はこの「原っぱ」と「遊園地」を、二つの対立する建築理念の比喩として用いている。そして前者の建築理念、つまりは、特定の行為のための空間を作るのではなく、行為と行為をつなぐものそれ自体をデザインするような建築を志す。「B 空間がそこ

で行われるだろうことに対して先回りしてしまつてはいけない」というわけだ。

では、造作はすくないほうがいいのか。<sup>(注7)</sup> ホワイトキューブのようなまったく無規定のただのハコが理想的だということになるのだろうか。ちがう、と青木はいう。

まったくの無個性の抽象空間のなかで、理論的にはそこでもできるということではない。たとえば、工場をアトリ  
エやギャラリーに改装した空間が好まれるのは、それが特性のない空間だからではない。工場の空間はむしろ逆に、きわめ  
て明確な特性を持っている。工場には、様々な機械の自由な設置を可能にするために、できる限り無柱の大きな容積を持  
た空間が求められる。そこでの作業を考え、部屋の隅々まで光が均等に行き渡るように、天井にはそのためにもっとも適切  
な採光窓がとられる。その目標から逸脱する部位での建設コストは切り詰められる。工場はこうした論理を徹底すること  
でつくられてきた。この結果として、工場は工場ならではの空間の質を持つに至る。工場は、無限定の空間と均一な光で満た  
されるということと引き替えに、一般的な意味での居心地の良さを捨てるという、明確な特性を持った空間なのである。工  
場は、単に、空間と光の均質を実現した抽象的な空間なのではない。工場は、そこでの作業を妨害しない範囲で、柱や梁<sup>はり</sup>  
<sup>(注8)</sup> トラスが露出されている、きわめて物質的で具体的な空間なのである。

このような空間に「自由」を感じるのは、そこではその空間の「使用規則」やそこでの「行動基準」がキャンセルされているから  
だ。「使用規則」をキャンセルされた物質の<sup>(イ)</sup>カタマリが別の行為への手がかりとして再生するからだ。原っぱもおなじだ。そ  
こは雑草の生えたでこぼこのある<sup>(ウ)</sup>サラチであり、来るべき自由な行為のために整地されキューブとしてデザインされた空間  
なのではない。そこにはいろんな手がかりがある。

木造家屋を再利用したグループホームは、逆に空間の「使用規則」やそこでの「行動基準」がキャンセルされていない。その意味  
では「自由」は限定されているようにみえるが、そこで開始されようとしているのは別の「暮らし」である。からだと物や空間との

たがいに浸透しあう関係のなかで、別のひととの別の暮らしへと空間自体が編みなおされようとしている。その手がかりの(エ) ジューマンする空間だ。青木はいう。「文化というのは、すでにそこにあるモノと人の関係が、それをとりあえずは結びつけていた機能以上に成熟し、今度はその関係から新たな機能を探る段階のことではないか」と。そのかぎりでは C 高齢者たちが住みつこうとしているこの空間には「文化」がある。

住宅は「暮らし」の空間である。「暮らし」の空間が他の目的を明確にもった空間と異なるのは、そこでは複数の異なる行為がいれば同時並行でおこなわれることにある。何かを見つめながらまったく別の物思いにふけっている。食事をしながら、おしゃべりに興ずる。食器を洗いながら、子どもたちと打ち合わせをする。電話で話しながら、部屋を片づける。ラジオを聴きながら、カケイ(オ) ボをつける……。食事、労働、休息、調理、育児、しつけ、介護、習い事、寄りあいと、暮らしのいろいろな象面(注9)がたがいに被(か)さりあっている。これが住宅という空間を濃くしている。(犬なら、餌(えさ)を食いながら人の顔を眺めるということができない？ 排尿しながら、他の犬の様子をうかがうということができない？)

住宅は、いつのまにか目的によって仕切られてしまった。リビングルーム、ベッドルーム、仕事部屋、子ども部屋、ダイニングルーム、キッチン、バスルーム、ベランダ……。生活空間が、さまざまな施設やゾーニング(注10)によって都市空間が切り分けられるのとおなじように、用途別に切り分けられるようになった。当然、ふるまいも切り分けられる。襖を腰を下ろして開けるというふうに、ふるまいを鎮め、それにたしかかな形をあたえるのが住宅であったように、歩きながら食べ、ついでにコンピュータのチェックをするというふうに、(注意されながらも)その形をはみだすほどに多型的に動き回らせるのも住宅である。 D 行為と行為をつなぐこの空間の密度を下けているのが、現在の住宅である。かつての木造家屋には、いろんなことがそこできるという、空間のその可塑性によって、からだを眠らせないという知恵が、ひそやかに挿し込まれていた。木造家屋を再利用したゲループホームは、たぶん、そういう知恵をひきつこうとしている。

(鷺田清一「身ぶりの消失」による)

(注)

- 1 グループホーム——高齢者などが自立して地域社会で生活するための共同住居。
- 2 デイ・サーヴィス——高齢者などのため、入浴、食事、日常動作訓練などを日帰りで行う福祉サービス。
- 3 いざりながら——座った状態で体の位置をずらしながら。
- 4 「何言うておすな」・「お座りやす」——それぞれ「何をおっしゃっているんですか」・「お座りなさいませ」の意。
- 5 「痴呆」——認知症への理解が深まる前に使われていた言葉。
- 6 青木淳——建築家(一九五六～)。
- 7 ホワイトキューブ——美術作品の展示などに使う、白い壁面で囲まれた空間。
- 8 トラス——三角形を組み合わせた構造。
- 9 象面——ここでは暮らしのなかの場面のこと。
- 10 ゾーニング——建築などの設計において、用途などの性質によって空間を区分・区画すること。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

1 キヨソ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 教科書にジュンキヨする  
キヨシユウを明らかにする  
トツキヨを申請する  
キヨジツが入り混じる  
ボウキヨに出る

(イ)

2 カタマリ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 疑問がヒヨウカイする  
キカイな現象  
カイモク見当がつかない  
ダンカイの世代  
カイコ趣味にひたる

(ウ)

3 サラチ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- セイコウウドクの生活  
大臣をコウテツする  
コウキユウテキな対策  
技術者をコウグウする  
キヨウコウに主張する

(エ)

4 ジュウマン

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ジュウコウを向ける  
ジュウナンに対応する  
他人にツイジュウする  
施設をカクジュウする  
ジュウオウに活躍する

(オ)

5 カケイボ

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ゲンボと照合する  
世界的なキボ  
亡母をシボする  
懸賞にオウボする  
ボヒメイを読む

問2 傍線部A「からだは家のなかにある」というのはそういうことだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 6。

- ① 身体との関係が安定した空間では人間の身体が孤立することはないが、他のひとびとと暮らすなかで自然と身に付いた習慣によつて、身体が侵蝕されているということ。
- ② 暮らしの空間でさまざまな記憶を蓄積してきた身体は、不自然な姿勢をたちまち正してしまうように、人間の身体はそれぞれの空間で経験してきた規律に完全に支配されているということ。
- ③ 生活空間のなかで身に付いた感覚によつて身体が規定されてしまうのではなく、経験してきた動作の記憶を忘れ去ることで、人間の身体は新しい空間に適応し続けているということ。
- ④ バリアフリーに作られた空間では身体が空間から疎外されてしまうが、具体的な生活経験を伴う空間では、人間の身体は空間と調和していくことができるのでふるまいを自発的に選択できているということ。
- ⑤ ただ物理的に空間の内部に身体が存在するのではなく、人間の身体が空間やその空間にいるひとびとと互に関係しながら、みずからの身体の記憶に促されることでふるまいを決定しているということ。



問3

傍線部B「空間がそこで行われるだろうことに対して先回りしてしまつてはいけない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 原っぱのように、遊びの手がかりがきわめて少ない空間では、行為の内容や方法が限定されやすく空間の用途が特化される傾向を持つてしまうから。
- ② 原っぱのように、使用規則や行動基準が規定されていない空間では、多様で自由な行為が保証されているためにかえってその空間の利用法を見失わせてしまうから。
- ③ 遊園地のように、明確に定められた規則に従うことが自明とされた空間では、行為が事前に制限されるので空間を共有するひとびとの主体性が損なわれてしまうから。
- ④ 遊園地のように、その場所で行われる行為を想定して設計された空間では、行為相互の偶発的な関係から空間の予想外の使い方が生み出されにくくなるから。
- ⑤ 遊園地のように、特定の遊び方に合わせて計画的にデザインされた空間では、空間の用途や行為の手順が誰にでも容易に推測できて興味をそいでしまうから。

問4

傍線部C「高齢者たちが住みつこうとしているこの空間には『文化』がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、人のふるまいが制約されているということとひきかえに、伝統的な暮らしを取り戻す可能性があるということ。
- ② 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、多くの入居者の便宜をはかるために設備が整えられているので、暮らすための手がかりが豊富にあり、快適な生活が約束されているということ。
- ③ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、そこで暮らす者にとって、身に付いたふるまいを残しつつ、他者との出会いに触発されて新たな暮らしを築くことができるということ。
- ④ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、空間としての自由度がきわめて高く、ひとひとがそれぞれ身に付けてきた暮らしの知恵を生かすように暮らすことができること。
- ⑤ 木造家屋を再利用したグループホームという空間では、さまざまな生活歴を持ったひとひとの行動基準の多様性に対応が可能のため、個々の趣味に合った生活を送ることができるということ。

問5 傍線部D「行為と行為をつなぐこの空間の密度を下けているのが、現在の住宅である」とあるが、それはどういうことか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

9。

- ① 現在の住宅では、仕事部屋や子ども部屋など目的ごとに空間が切り分けられており、それぞれの用途とはかわらない複数の異なる行為を同時に行ったり、他者との関係を作り出したりするような可能性が低下してしまっていること。
- ② 現在の住宅では、ゾーニングが普及することでそれぞれの空間の独立性が高められており、家族であつてもそれぞれが自室で過ごす時間が増えることで、人と人が触れあい、関係を深めていくことが少なくなってしまうていること。
- ③ 現在の住宅では、空間の慣習的な使用規則に縛られない設計がなされており、居住者たちがそのときその場で思いついたことを実現できるように、各自がそれぞれの行為を同時に行えるようになってきていること。
- ④ 木造家屋などかつての居住空間では、居間や台所など空間ごとの特性が際立っていたが、現代の住宅では、居住者が部屋の用途を交換でき、空間それぞれの特性がなくなってきたこと。
- ⑤ 木造家屋などかつての居住空間では、人体の運動と連動して空間が作り変えられるような特性があつたが、空間ごとの役割を明確にした現在の住宅では、予想外の行為によって空間の用途を多様にすることが困難になっていること。

問6 この文章の表現について、次の(i)・(ii)の各問いに答えよ。

(i) 波線部Xの表現効果を説明するものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

10。

- ① 議論を中断し問題点を整理して、新たな仮説を立てようとしていることを読者に気づかせる効果がある。
- ② これまでの論を修正する契機を与えて、新たに論を展開しようとしていることを読者に気づかせる効果がある。
- ③ 行き詰まった議論を打開するために話題を転換して、新たな局面に読者を誘導する効果がある。
- ④ あえて疑問を装うことで立ち止まり、さらに内容を深める新たな展開に読者を誘導する効果がある。

(ii) 筆者は論を進める上で青木淳の建築論をどのように用いているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 筆者は青木の建築論に異を唱えながら、一見すると関連のなさそうな複数の空間を結びつけ、「暮らし」の空間として木造家屋を再利用したグループホームに関する主張を展開している。
- ② 筆者は青木の建築論の背景にある考え方を例に用いて、それぞれの作業ごとに切り分けられた現代の「暮らし」の空間を批判し、木造家屋を再利用したグループホームの有用性を説く主張を補強している。
- ③ 筆者は青木の建築論を援用しながら、空間の編みなおしという知見を提示することで、「暮らし」の空間として木造家屋を再利用したグループホームに価値を見いだす主張に説得力を与えている。
- ④ 筆者は青木の建築論を批判的に検証したうえで、現代の「暮らし」の空間と工場における空間とを比較し、木造家屋を再利用したグループホームに自由な空間の良さがあると主張している。

## 第2問

次の文章は、加藤幸子の小説「海辺暮らし」の一節である。漁師であつた夫に先立たれたお治婆さん（元木治）は、他の土地に住む娘夫婦の同居の誘いを断り、夫が漁業権を手放した際に得た補償金の残金を元手に、干潟に遊びに来る客を相手にした駄菓子屋を一人で営んでいる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。（配点 50）

5 店に続く四畳半は、風の通り道である。海の匂いが満ちていて、貝殻にもぐりこんだ宿借りの心境が分つてくる。お治婆さんがうたた寝をしているところへ「ゴーガイさん」が訪ねてきた。お治婆さんは慌てて起きあがり、一枚だけの客用座布団の上へ招き入れた。市役所からは月一度の割りで、だれかが訪問にくる。水質調査の名目だが、お治婆さんの体と気持が弱つて、家を手放すつもりになつてはいまいか偵察するためである。その意図を承知の上で、お治婆さんは「ゴーガイさん」の訪問を楽しみにしている。

今回は初対面の人だつた。先月までは停年間近の白哲の紳士で、結構話が弾んだものだつた。新しい訪問者は、アニメの口ポットみたいに顔も肩も胴体も四角ばつてい

「公害課の梶と申します」

10 傍らに採集した海水の広口瓶をていねいに立ててから、名刺をお治婆さんに差し出した。訪問先が、まれにみる陋屋であることとにびくともした様子はない。お治婆さんはちよつと感心した。ルルは初めて会う人物を特に念入りに調べる癖があるので、梶氏の前に坐つて動こうとしない。そのためまるで猫に向かつて、お辞儀をしているように見える。

「元木さんのことは、前任の平田からよくうかがっております」

「前の方は、どうされましたか？」

「県庁のほうへ栄転してゆかれました」

15 「まあ、それはよかったですこと」

お治婆さんは、梶氏を（ア）つくづくと眺めた。壮健そうな働き盛りである。A 教育のしがいもあるというものだ。

「そうそう」お治婆さんは急に思い出した。

「前の方は、よく浅蜷あさりの佃煮つくだにを召しあがつていられました」

蠅帳(注4) はいちようを開けて佃煮の小皿を取り出すと、冷えた麦湯(注5)とともに梶氏にすすめた。

20 「こういうものが、お口に合うかどうか……」

「あ、これは、どうも」相手は恐縮した。「ぼくの好物ですよ。母の料理は和風でしたのでね。頂きます」  
行儀よく梶氏は三個の浅蜷を口へ運ぶと、首をかしげて言った。

「とてもいいお味ですな。最近、佃煮の製造法が画一的になってしまいましたが、これは一味ちがう。酒悦(注6) しゅえつですか、それとも  
貝新？」

25 「あら、いやだ」お治婆さんは、頬ほおを染めた。

「あたしが作ったんですよ。この前で掘った浅蜷で」

「市役所」はすんと箸はしを戻し、その拍子に畳に転げた一個にルルが飛びついた。

「ここの貝なんですか、ここの干潟の……」

声がかかなり上ずっている。

30 「そうですとも」お治婆さんは力をこめて言った。「ここの浅蜷はよく太って汁気が多いので、おだしがよく出ますよ。たまに  
稚児蟹(注7) ちごがにも集めて煮ますけれど、あれはいがいがいくちあたがして口当りが悪いんですの。でもカルシウムがいっぱいありますからね、蟹  
の甲羅には」

風が急いで通り抜け、お治婆さんの短い白髪が総毛立った。梶氏は坐り直すと、緊張おもしろの面持で言った。

「ごぞんじないんですか。この干潟の水の測定値はBOD 14 PPM(注8)です」

「はいはい、前の方もそのように言われていましたよ」

35

「とても汚れているという証拠です」

「でもこういうお水のほうが、浅蜷や牡蠣はよく肥えますわ」

「そればかりじゃありませんよ」

梶氏は(イ)躍起になって言った。

40 「川向うの埋立地に工場がびっしり建っているでしょうが」

「ええ、ええ。毎日きれいな煙を吐いて……まるで七色鉛筆のよう」

「呑気なことを言わないでください。あれはみな悪い煙や廃水を出すので、住宅地から追い出されてきた工場です」  
「……………」

初めて老婆が沈黙したので、梶氏は調子に乗ってたたみかけた。

45 「廃水には、いろいろの化学物質が混じっているのです。だからそれを吸いこんでいる貝なども食べないほうがいいのです」

「おや、まあ」

お治婆さんは(ウ)頓狂な声で叫んだ。

「この貝にもドクが入っているのですか」震える指で、彼女は佃煮の小皿を差した。「どうしましょう。あたしの責任だわ」  
「え？」

50 「だって日曜祭日には、何百人っていう町の人たちが貝掘りに来るんですもの。今日だってほら、子どもたちがあんなに夢中になって……。さつそく立札を立てなくっちゃ。『工場からドクが出ています。貝を採らないでください』って。ここはあたしの干潟ですもの……。もう間にあわないかも知れないけれど、でも知った以上は……」

**B** 新任の市役所の顔色が変わった。

55 「そんなこと、まったく必要ありませんよ、おばあちゃん。こうやって毎月嚴重に検査を実施しているのは、そのためなんですから。基準値を超えることはめったにないのです。ただ、気分の問題で……」

「おや、そうでしたか」お治婆さんにはにっこりした。「気分なら、今のところ上々ですわ」  
「そうでしょうとも」

「さあさあ、ドクでないことが分つたのですから、もう少しおつまみくださいませ。佃煮の好きな方に巡り会って、ほんとうに嬉しいですわ」

梶氏は仕方なく小皿に箸を近づけて、数個の浅蜷を麦湯で流しこんだ。この苦役が終おわると、彼はある決心の色を浮かべて、お治婆さんに向き直つたのである。

「さて、元木治さん」

「はい」お治婆さんは小首をかしげて、素直な生徒みたいに返事をした。

「来年度の市の計画では、この干潟を埋め立ててゴミ処理場を建設することになっています」

お治婆さんの首の傾斜は、ますます深くなった。

「だから元木さんには、本年中にぜひここを引き払っていただきたいのですよ」

お治婆さんは麦湯を啜すすつて、かすかに笑みを浮かべた。

「もちろん最大の補償をさせていただきます。引っ越しの費用も労働力も、私どもで提供いたします」

少し疑いを生じながら、梶氏は続けた。お治婆さんは相手の口もとをじつと見つめていながら、何の反応も表明しなかった。

「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ・ネ」

梶氏は周囲を見まわした。彼はこの金属的な音声で、目の前の老婆から発せられたことを信じる事ができなかったのである。

「ゼンゼン聞コエナクナリマシタ」

「は？」

「トキドキ耳ガ、遠イトコロニ行ツテシマウノデス。アナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス。耳ハタ方ニハ戻リマス。良カッタラソレマデココデオ待チクダサイマセ」



市の意向を伝えようとする虚しい努力の末に、梶氏は落胆しきつて立ちあがった。お治婆さんはその前に立ちふさがった。そして一本の棒キャンデーを差し出したのである。

「今日ハトテモ暑イノデ、町ヘノ道々、コレデロノ中ヲ冷ヤシテオ帰リクダサイマセ」

「市役所」が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った。梶氏は、もらつたキャンデーを舐めるために、ときどき立ち止まった。そうしなければ、たぶん溶けたキャンデーは掌からズボンに滴り落ちて、染みをつくる原因になつたであろう。

太陽が町の後ろに、引きずりこまれていく。空気が枯れ草のように黄ばみはじめた。七本の煙突は、ごく薄い最後の息を吐くと、錆釘色になつて凍りついた。干潟に分散していた人影が、獲物を抱えて立ち去っていくと、見張っていた鳥たちが戻つてきた。河口で餌を漁った鳥たちは、休息のほかには欲していないように見えた。ウミネコが灰色の船団のように水面に漂っている。彼らが陸に上がったら店仕舞いしよう、とお治婆さんは考えた。三羽の白い鷺が足首を水に浸して、ゆつくりと横切つていった。お治婆さんは、捕らえ損ねたアオサギのことを思い出した。喉に針を刺したまま、広い葦原の中で同じ夕暮れを眺めているだろう。

90 「おいで」

だれかの声がした。もしかしたら、自分でつぶやいたのかもしれない。お治婆さんは静かに周囲を見まわした。上げ潮に攻められる、干潟はずっと小さくなっていた。水の中にところどころ枕ほどこに残つた陸地があり、チゴガニが飽きもせず銚を振っていた。お治婆さんは、蟹たちに話しかける資格を得たいと思った。スカートを濡らしながら、その場に屈んだ。チゴガニは運動を止めた。水がお治婆さんと蟹の群れをすばやく分断し、その最後の瞬間に蟹たちが穴に逃げこむのが見えた。お治婆さんは立ち上がり、ゆつくりと干潟のかなめの部分に向つて歩いた。岩陰に、舟虫に中身を食い荒らされた甲羅が散乱している。

焼場で拾いあげたお骨と同じように軽々としている。源さんのほうは陶磁の骨壺に収めたけれど、海の生き物の骨は光線に灼

かれて風が吹き飛ばす。

干潟は渴いた生き物のように、水を吸いこみ続けた。太陽の死んだ空から鉛色が注がれて、少しずつ夜が開いていく。鳥たちは互いに、触れあうばかりの距離にうずくまった。

そのとき、猫がどこかで鳴いた。今まで聞いたことのないほどの物憂げな声だった。気がつくと、ルルが孤島のように水に囲まれた陸地に立つて、こちらを見ているのだ。お治婆さんはふしぎに思った。足の裏を濡らすことさえ嫌いな猫だった。ルルはもう一度鳴くと、いきなり飛びあがった。何度も何度も、目に見えない掌で突かれているように跳んだ。空にのぼって、星座になりたがっている猫みたいだった。それから突き損ねた毬まりのように、二、三度小さく弾むと横たわった。お治婆さんが近づいていくと、猫はのっそり起きあがった。しかしその目は飼主かいぬしを見てはいなかった。家とは反対の、暗く単調な海を向いていた。お治婆さんの視野がしだいに狭くなり、中心に細い光のリボンが残った。闇やみを縦に切り開いたその光の中に、猫だけがいつまでも坐っていた。

(注) 1 白哲——色白なこと。

2 陋屋——狭くてみすばらしい家。

3 ルル——お治婆さんが飼っている猫の名。

4 蠅帳——蠅はえなどが入らないように金網などを張ってある、食物を入れるための戸棚。

5 麦湯——麦茶のこと。

6 酒悦・貝新——いずれも佃煮しんじの老舗の名。

7 稚児蟹——スナガニ科の小型の蟹。体長一センチ程度で、河口の干潟などに群れをなして生息している。

8 BOD——生物化学的酸素要求量。有機物による水質汚染の度合いを表す指標に用いられる。

9 源さん——お治婆さんの亡くなった夫。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア)

つくづく

12

- ① 興味を持ってぶしつけに
- ② ゆっくりと物静かに
- ③ 見くだすようにじろじろと
- ④ 注意深くじつくりと
- ⑤ なんとなくいぶかしげに

(イ)

躍起になって

13

- ① 夢中になって
- ② さとすように
- ③ 威圧するように
- ④ あきれたように
- ⑤ むきになって

(ウ)

頓狂な声

14

- ① びっくりして気を失いそうな声
- ② あわてて調子はずれになっている声
- ③ ことさらに深刻さを装った声
- ④ とっさに怒りをごまかそうとした声
- ⑤ 失望してうちひしがれたような声

問2 傍線部A「教育のしがいもあるというものだ」とあるが、このときのお治婆さんの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 初対面の自分にも丁寧なあいさつをする梶氏を実直だが真面目過ぎる人だと思い、現実にはそれほど簡単に物事が運ばないことを思い知らせてやろうと手ぐすねを引いている。
- ② 初めて見るであろう陋屋にも全く物怖しする様子を見せない梶氏を骨のある役人だと思い、立ち退きを求めるためには役人としてどう振る舞えばよいかをわからせてやろうと意気込んでいる。
- ③ 広口瓶をていねいに立てる梶氏の几帳面なしぐさから梶氏を信頼できる人だと思い、この人になら人々の遊び場となっている干潟の価値を認めさせることができるのではないかと期待している。
- ④ 初めての訪問にもかかわらず臆する気配を見せない様子から梶氏を頑強そうな人だと思い、役所の言いなりにはならないこちらの対応のしかたを知らしめる相手として不足はないと楽しみにしている。
- ⑤ 物言いや態度から役人としての能力の高さが認められる梶氏を実行力も伴った人だと思い、家を手放すつもりはないという自分の考えを役所に理解させることができるはずだと奮い立っている。

問3 傍線部B「新任の市役所」の顔色が変わった」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 勢いこんで口にした、工場から出される煙や水に注意を促した言葉が、工場からドクが出ていると書かれた立札を実際に立てる行動にお治婆さんを誘いかねない事態になったことに驚き、うろたえたから。
- ② 工場から出る煙や水の汚染は嚴重な検査をしているので実際は問題にならないという主張を無視して、工場のドクについての立札を立てるといってお治婆さんの行動があまりにも独善的なので、びっくりしてしまったから。
- ③ 工場から出ているドクに対して無頓着<sup>むとんじやく</sup>なお治婆さんにドクの危険性を説明していたが、思いがけなくお治婆さんが取り乱してしまったので責任を感じ、工場の害を強調し過ぎたことを取りつくろおうと焦ったから。
- ④ 市の意向に逆らい続けるお治婆さんを警戒して訪問すると、気さくに浅蜷の佃煮を勧めてくれる親切な人柄に心を許し始めたのだが、干潟を自分の土地であるかのように言うので、そのずうずうしさに憤りを覚えたから。
- ⑤ 工場の危険性を説明して干潟から立ち退いてくれるよう説得に來ただけなのに、お治婆さんに町の人たちが採る貝にドクが入っていると思い込ませてしまい、良心の呵責<sup>かしやく</sup>を感じさせてしまったことを気の毒に感じたから。

問4 傍線部C「アナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 文字通りには、体の変調によつて梶氏との会話を中断したことをお治婆さんが悔やむ言葉であるが、梶氏を責める気持ちが表されており、市役所の担当者と対等に渡り合おうとするお治婆さんの気丈さがうかがわれる。
- ② 文字通りには、体の変調から会話が続けられないことをお治婆さんが心から梶氏に訴える言葉であるが、市役所の担当者とかかり合うことを諦める<sup>あきら</sup>気持ちが表れており、梶氏を教育する気力が失せていることがうかがわれる。
- ③ 文字通りには、体の変調が起こったお治婆さんが会話の中断を申し出る形式的な言葉であるが、話を続けられなくなった切ない心情が隠されており、会話を介して孤独な思いを解消しようと願っていることがうかがわれる。
- ④ 文字通りには、お治婆さんが体の変調を感じ梶氏との会話を続けられなくなったことを惜しむ言葉であるが、市役所の担当者に対する皮肉が込められており、梶氏をやりすごそうとするお治婆さんの賢さがうかがわれる。
- ⑤ 文字通りには、お治婆さんが体の変調により梶氏の楽しい話を聞けなくなったことを謝る言葉であるが、空空しい言い方であり、そもそも梶氏とは会話を交わしなかったお治婆さんの本音がうかがわれる。

問5 20ページの空白行より後の84～106行目の部分はどのような意味を持っているか。その説明として最も適当なものを、次の

- ①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① チゴガ二と向き合うお治婆さんの姿を通して、他人との必要以上の付き合いを避けてひとりであぐさしく暮らし、干潟に生息する生き物を救おうとして生きてきたお治婆さんの様子が情緒的に描かれている。
- ② 飛び跳ねるルルの一連の行動には、繰り返し立ち退きを迫る市役所の担当者にお治婆さんが懸命に抗<sup>あらが</sup>っている姿が重ねられており、干潟での生活を必死に守り続けるお治婆さんの今後の生き方が間接的に描かれている。
- ③ 干潟に生きる海の生き物たちと死を結びつけた表現が用いられることで、人間の営みとはかわりなく生き物たちが淘汰<sup>たうた</sup>されていくという過酷な自然のありようが具体的に描かれている。
- ④ 夜を迎えつつある干潟と、そこにひっそりと息づく生き物たちの姿が示されることで、工場の停止が干潟の生き物たちに安堵<sup>あんど</sup>をもたらしたことが感覚的に描かれている。
- ⑤ 太陽、工場、チゴガ二、猫についての繊細な視覚イメージを伴った表現の中に死を連想させる要素がちりばめられていることで、干潟に生きるお治婆さんの身に起こるであろう事態が暗示的に描かれている。

問6 この文章中の叙述に対する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 

19
----

 ・ 

20
----

 。

① 6・7行目の「新しい訪問者は、アニメのロボットみたいに顔も肩も胴体も四角ばっている」は、梶氏の体型の描写であるとともに、梶氏が立派な体格をしたヒーロー的な存在であることも明らかにしている。

② 27行目の「市役所」は、梶氏を勤め先の名称によって指し示す擬人法であり、梶氏が「市役所」を代表して公害対策に日々奔走する役人であることを強調している。

③ 54行目の「おばあちゃん」という呼び方が62行目の「元木治さん」に変わったことは、市側の意向を伝達するために、梶氏が会話におけるふたりの関係性を変化させ、自らの公的な立場を明確にしたことを示している。

④ 80行目の「市役所」が肩を落として帰っていく様を、お治婆さんとルルは並んで見送った」という描写は、梶氏が責めを負わせられる側であり、お治婆さんが責める側であるという関係を具体的に示している。

⑤ 103・104行目の「お治婆さんが近づいていくと、猫はのっそり起きあがった」では「ルル」が「猫」と記されており、この表現のしかたの変化は、お治婆さんとルルとの心理的距離が大きくなりつつあることを反映している。

⑥ 105・106行目の「闇を縦に切り開いたその光の中に、猫だけがいつまでも坐っていた」という描写は、お治婆さんの狭くなった視野を抽象的に示すとともに、荘厳でありながら耽<sup>たん</sup>美的な雰囲気を感じさせている。



### 第3問

次の文章は、源氏と平氏がそれぞれの身内で敵味方に分かれて戦った内乱を描いた『保元物語』の一節である。前半は、勝利した後白河天皇方の源義朝が、敗北した崇徳院方の父源為義と対面する場面であり、後半は、義朝の家来二人のやりとりを中心とする場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

(注1)  
左馬頭、さまのかみ

ともかくも物も言はず、涙をはらはらと流して、「さらば、汝、なんぢよきやうに計らひ申せ」とぞのたまひける。正清、まさきよ

「さ候はば、御対面候ひて、(ア)すかしまゐらせ給へ」と申しければ、流るる涙を押し拭ひて、さらぬ体にもてなし、入道の御前(注3)

に参り、「義朝、今度の合戦の大將軍として、忠節を致す。数輩の若党討ち死にし、手負ひ候ふ。しかりといへども、いまだ勲

功の賞にも預からず候ふのところに、御首を刎ねてまゐらせよと、度々仰せ下され候ふのあひだ、今度の忠賞に申し替へて、御

命ばかりをこそ申し助けまゐらせて候へ。ただし、平氏清盛、させる忠功も候はねども、大国あまた賜り、一族朝恩に誇る。義

朝など、頭をさし出だすべきやうも候はず。それに、かくて御わたり候へば、石の中の蜘蛛とやらのやうに思え候ふ。人の

口は悪きものにて候へば、いかなる讒言や出で来候はんずらん。東山なる所に、庵室を構へ持ちて候ふ。貴き所にて候へば、

かれに渡らせ給ひ候ひて、しづかに御念仏候へかし」と申されければ、入道、まづ涙をはらはらとこぼして、「あはれ、人間の宝

には、子に過ぎたるものこそなかりけれ。子ならざらん者、誰かはかく身に替へて助くべき。生々世々にもこの恩忘るまじき

ぞよ」とて、手を合はせ喜び給ふ。義朝、心中に、「無慙のことかな。ただ今斬られ給はんことをも知り給はず、かくのたま

ふよ」と思ひければ、A涙のすすむを、さらぬ体にもてなし、「さらば、正清、御輿こしまゐらせよ」とのたまへば、「承り候ふ」と

て、白木なる腰車を引き出だす。さすがに、なごりの惜しければ、出で遣り給はざりけるを、正清、「疾う疾う」と申すほどに、

心ならず乗り給ふ。(注5)

夜半ばかりのことなれば、いづこをそことは知らねども、東の方へは行かずして、七条西の朱雀へ引きて行く。波多野次郎、力者どもに輿を昇かせて、出で来たりけり。鎌田、朱雀にて車より輿に乗り移り給はんとおころを討ち奉らんと、太刀を

郎、力者どもに輿を昇かせて、出で来たりけり。鎌田、朱雀にて車より輿に乗り移り給はんとおころを討ち奉らんと、太刀を

構へ、待ちかけたり。波多野次郎は、いまだこのことよくも心得ざりければ、鎌田が袖そでを控へて言ふやう、「や、殿、これはいかなる御計らひぞ。このこと、総じて心得ず。」(イ) (注8)すでに失ひ奉らんとにこそあんなれ。まことに、入道殿の朝敵とならせ給ふ

ことは、力及ばざることなり。されども、今度、頭殿(注8)の大将軍を承らせ給ふといふも、誰故ぞ。入道殿の御威勢なり。東国の輩ともがら多く付き奉るといふも、また、入道殿の御譲りの故ぞかし。さこそ勅命力無しといふとも、正ただしき父の首をばいかでか斬らせ給ふべき。返す返すも口惜しきことかな。明日は天下の口遊くちすまひとなり、人に指を差されさせ給はんずる頭殿の御悪名あくみやうこそ心

憂うれけれ。そもそも、昔、伊予殿(注9)、相模守さがみのかみにて、鎌倉にわたらせ給ひし時は、東八箇国(注10)の侍、八幡殿を主と頼たのまぬ者やありし。その子にてましませば、入道殿も我等が主、その子にてましませばこそ、頭殿も主なれ。中にも、和殿(注11)は入道殿の御跡あと懐ふところにて

生おほし立てられまゐらせて、御好深よしみき人ぞかし。いかでかやみやみとして討ち奉らんとはし給ふぞ。助け奉るまでこそなくとも、せめては、かくと申して、最後の御念仏をも勧め奉り給へかし」と言ひければ、**B**(注12)理ことわりとや思ひけん、鎌田、「さらば、和殿、その様を申し給へ」と言ふあひだ、義通(注13)、車の轅なぐさに取り付きて、泣く泣く申しけるは、「**(ウ)**いまだ知らせ給ひ候はずや。頭殿の御承りにて、正清が太刀取りにて、ただ今、車と輿の間にて討たれさせ給ふべきにて候ふなるは」とて、袖を顔に押し覆ひ

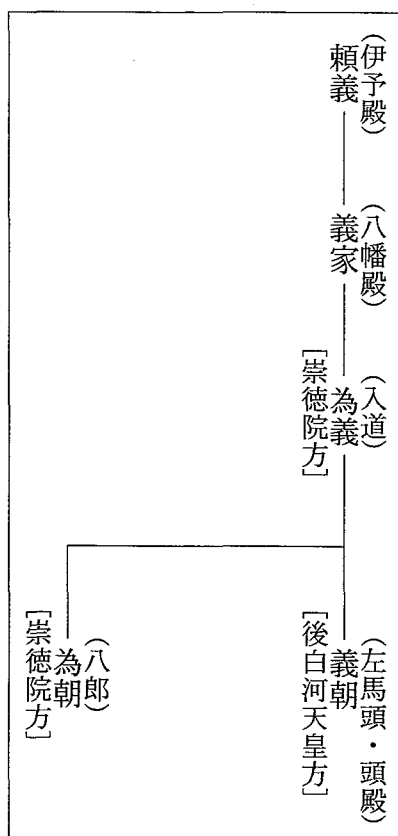
て、涙にむせびてうつ伏しければ、入道、大きに驚きて、「口惜しきことござんなれ。義朝は、さては、だしぬきけるよな。あはれ、八郎(注15)がよく謂いひつるものを。かくあるべしと知りたらば、六人の子供、前後に立て、矢種やだねのあらん限り射尽くして、討ち死にして失うせたらば、名を後代こうたいにあげてまし。さては、犬死にせんずるにこそ。今度の合戦に院方勝たせ給ひたらば、いかなる

勲功・勳賞(注16)にも申し替へて、などか義朝一人を助けざるべき。あはれ、親の子を思ふほど、子は親を思はざりけるよ。『諸仏念衆生(注17)、衆生不念仏。父母常念子、子不念父母』と、仏の説かせ給へるは、少しも違たがはず。ただし、**C**かくはあれども、全く我が子悪かれとは思はぬなり。願はくは、上梵天(注18)・帝釈、下堅牢地神に至り給ふまで、義朝が逆罪を助けさせ給へや」とのたまひ

も終はてず、涙にむせび給ひけり。

(注)

- 1 左馬頭——源義朝。
- 2 正清——鎌田正清。義朝の家来。義朝の乳母子に当たる。
- 3 入道——源為義。義朝の父。
- 4 石の中の蜘蛛——身動きのとれないさま。
- 5 腰車——手で引く車。
- 6 七条西の朱雀——京の七条通りと朱雀大路の交差するあたり。
- 7 波多野次郎——義朝の家来。
- 8 頭殿——左馬頭。義朝のこと。
- 9 伊予殿——源頼義。為義の祖父。
- 10 東八箇国——今の関東地方にあたる八つの国。
- 11 八幡殿——源義家。為義の父。
- 12 跡懷——育ての親。
- 13 義通——波多野次郎。
- 14 轅——腰車の前後に突き出た二本の長い棒。
- 15 八郎——源為朝。為義の子。義朝の弟。
- 16 諸仏…念父母——諸仏は衆生を念へども、衆生は仏を念はず。父母は常に子を念へども、子は父母を念はず。
- 17 上梵天・帝釈…至り給ふまで——上は梵天・帝釈から、下は堅牢地神に至るまで。梵天・帝釈は仏法を守る神、堅牢地神は大  
地を守る神。
- 18 逆罪——主人や親を害するなど、地獄におちるほどの大罪。



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

く

23

。

(ア) すかしまゐらせ給へ

21

- ① 御簾越しみすにご覧なさいませ
- ② お気持ちをごなだめ申し上げなさいませ
- ③ 急いで参上なさいませ
- ④ 好きにお話し申し上げなさいませ
- ⑤ 催促しにお行きなさいませ

(イ) すでに失ひ奉らん

22

- ① はやく車をお取り壊し申し上げよう
- ② しばらく太刀をお隠し申し上げよう
- ③ なんとか苦しみを和らげ申し上げよう
- ④ いよいよ命を奪い申し上げよう
- ⑤ さつそくここからお連れ出し申し上げよう

(ウ) いまだ知らせ給ひ候はずや

23

- ① まだ事情をお話しになっていないのですか
- ② まだ理由をお聞きになっていないのですか
- ③ まだ意向をお尋ねになっていないのですか
- ④ まだ従者にお命じになっていないのですか
- ⑤ まだ事態がお分かりになっていないのですか

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |   |   |        |   |        |   |         |   |         |
|---|---|--------|---|--------|---|---------|---|---------|
| ① | a | 受身の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 使役の助動詞  | d | 動詞の活用語尾 |
| ② | a | 自発の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 尊敬の助動詞  | d | 使役の助動詞  |
| ③ | a | 尊敬の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 尊敬の助動詞  |
| ④ | a | 受身の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 使役の助動詞  |
| ⑤ | a | 尊敬の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 使役の助動詞  | d | 動詞の活用語尾 |

問3

傍線部A「涙のすすむ」とあるが、義朝がそのような状態になった理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

25

- ① 出て行けばすぐに斬られるかもしれないとためらっている父親の姿を目の当たりにすると、以前の勇ましかった父親像がくずれてしまい、悲しくてたまらないから。
- ② たいした手柄もあげていない平清盛の一族が栄えているのに対して、自分は勲功を立ててもなかなか恩賞がもらえず、くやしくてたまらないから。
- ③ 自分の味方をした若い侍たちが多数討ち死にしたうえに彼らを指揮した父親までもが処罰されるかと思うと、現実の過酷さが身にしみて感じられ、苦しくてたまらないから。
- ④ 思わぬ中傷を受けないように東山で謹慎した方がよいと言って欺いた言葉を、素直にありがたがっている父親を見ると、つらくてたまらないから。
- ⑤ 自分に惜しみなく愛情を注いでくれる父親を、家来である鎌田正清の言いなりになって斬らなければならないかと思うと、みじめでたまらないから。

問4 傍線部B「理とや思ひけん」の、「理」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 源氏の先祖代々の働きが裏目に出て、現在朝敵になってしまった為義は犠牲者なのだから、最大限の同情を寄せて、たとえ処罰する場合でも、人目に触れないように行い、懇ろに後を弔って念仏にはげむべきだということ。
- ② 源氏の先祖代々の中で、為義がはじめて東国の武士をまとめたために、鎌田正清や波多野義通たちは出世できたのだから、為義に感謝して、たとえ処罰する場合でも、神仏の加護があるように祈るべきだということ。
- ③ 源氏の先祖代々の働きによって、鎌田正清や波多野義通たちの現在の地位があるのだから、主人筋である為義を敬い、たとえ処罰する場合でも、落ち着いて最後の念仏が唱えられるように丁重な扱いをするべきだということ。
- ④ 源氏の先祖代々の方針を変えた為義のおかげで、鎌田正清や波多野義通たちは現在の地位を得たのだから、為義への恩を忘れず、たとえ処罰する場合でも、為義に出家する意志があるかどうか確かめた後にするべきだということ。
- ⑤ 源氏の先祖代々の行いによって、鎌田正清や波多野義通たちは人にならざるをえぬ指をさされずに済んだのだから、為義に感謝して、たとえ処罰する場合でも、為義の極楽往生を祈る念仏を唱えてからにするべきだということ。

問5 傍線部C「かくはあれども、全く我が子悪かれとは思はぬなり」にいたる為義の心情の変化の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 27。

- ① 義朝の仕打ちに衝撃を受け、親を思わぬ子は悪人だという仏の教えは本当だったと実感したが、親としては子を悪人として憎むことはできないと思い直し、義朝の仕打ちを許した。
- ② 義朝の仕打ちに衝撃を受け、親を思わぬ子はないという仏の教えは誤りだったと落胆したが、親としては戦の場で子に冷淡にされることを受け入れなければならないと思い直し、義朝の仕打ちを許した。
- ③ 義朝の仕打ちに衝撃を受け、かつて自分が親を思っていたほど、子は自分を思っていなかったと悲嘆したが、親としては子が薄情であつてもあきらめるほかないと思い直し、義朝の仕打ちを許した。
- ④ 義朝の仕打ちに衝撃を受け、自分だったら命に代えても子を助けるのにと立腹したが、親としては子が戦の場で勲功を立てられるなら少しも悪くはないと思い直し、義朝の仕打ちを許した。
- ⑤ 義朝の仕打ちに衝撃を受け、自分の子に欺かれるぐらいなら戦って討ち死にした方がましだったと後悔したが、親としては子が不幸にならないことを願いたいと思い直し、義朝の仕打ちを許した。



問6 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28。

- ① 為義や波多野義通の発言のなかに強意の「こそ」「ぞ」や反語の「や」が多用されることで、感情に強く訴える武士言葉の粗暴さが前面に出され、二人からの義朝や鎌田正清への非難の気持ちが強調されている。
- ② 為義や波多野義通の発言のなかに仏の教えや源氏の来歴が引用されることで、二人の主張に個人的見解の域を超えた根拠が加えられ、感慨を深めたり道義を重んじたりしている武士の姿が生き生きと描き出されている。
- ③ 為義、義朝、鎌田正清、波多野義通など、登場人物の行動が和漢混交文で叙述されることで、武士の姿が簡潔に力強く写し出され、常に勇ましくあろうとする武士の価値観が端的に描かれている。
- ④ 父為義、子義朝それぞれの視点から親子の心情が細やかに描かれることで、親子の情愛がすれ違ってしまっている理由が明確に示され、武士であるがゆえに最後まで譲り合えない二人の姿に説得力が生まれている。
- ⑤ 義朝の心情が会話文のなかで短く示される一方、為義の心情が地の文で詳しく説明されることで、義朝の仕打ちに対する武士としての為義の嘆きが深められ、義朝よりも為義の存在感の方が大きくなっている。

第4問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

六<sup>(注1)</sup>經<sup>りくけい</sup>之言<sup>フハ</sup>学<sup>ヲ</sup>肇<sup>はじ</sup>見<sup>ユルモ</sup>於<sup>ニ</sup>武<sup>(注2)</sup>丁<sup>てい</sup>之<sup>ズルニエツニ</sup>命<sup>レドモ</sup>說<sup>ジテハ</sup>而<sup>ス</sup>論<sup>ヲ</sup>為<sup>ヒ</sup>学<sup>ソント</sup>之道<sup>ヲ</sup>曰<sup>ヒ</sup>遜<sup>ソント</sup>

A

曰<sup>フ</sup>敏<sup>ト</sup>而<sup>ニ</sup>已<sup>ハ</sup>。遜<sup>トハ</sup>者<sup>シテ</sup>欲<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>謙<sup>セント</sup>退<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>如<sup>クスル</sup>有<sup>ナリ</sup>所<sup>ルガ</sup>不<sup>ル</sup>能<sup>ハ</sup>。敏<sup>トハ</sup>者<sup>シテ</sup>欲<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>進<sup>セント</sup>修<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>如<sup>クスル</sup>有<sup>ナリ</sup>所<sup>ルガ</sup>不<sup>ル</sup>及<sup>バ</sup>。退<sup>クハ</sup>則<sup>チ</sup>虚<sup>むなしクシテ</sup>而<sup>ニ</sup>受<sup>ケ</sup>人<sup>ニ</sup>進<sup>ムハ</sup>則<sup>チ</sup>勤<sup>メテ</sup>以<sup>テ</sup>励<sup>マス</sup>己<sup>ヲ</sup>。二者<sup>ハ</sup>固<sup>ヨリ</sup>不<sup>ル</sup>

容<sup>ベカラ</sup>偏<sup>(1)</sup>廢<sup>ス</sup>也<sup>ニ</sup>。

孔<sup>ハ</sup>子<sup>ナレドモ</sup>大<sup>ナレドモ</sup>聖<sup>トセ</sup>人<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>不<sup>ラハ</sup>自<sup>ラハ</sup>聖<sup>トセ</sup>故<sup>ニ</sup>曰<sup>フハ</sup>我<sup>(注3)</sup>非<sup>ズト</sup>生<sup>ラニシテ</sup>而<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>者<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>謂<sup>フ</sup>遜<sup>ト</sup>

B

矣<sup>リ</sup>。然<sup>シテ</sup>而<sup>ニ</sup>又<sup>タ</sup>曰<sup>フハ</sup>好<sup>(注4)</sup>古<sup>シヘラニシテ</sup>敏<sup>ニシテ</sup>以<sup>テ</sup>求<sup>メタル</sup>之<sup>ヲ</sup>者<sup>ナリト</sup>則<sup>チ</sup>其<sup>ノ</sup>求<sup>レ</sup>之<sup>也</sup>曷<sup>ナリト</sup>嘗<sup>ニ</sup>不<sup>ル</sup>貴<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>

敏<sup>ニ</sup>乎<sup>ナラ</sup>。他<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>顔<sup>(注5)</sup>曾<sup>さうノ</sup>二<sup>ニ</sup>子<sup>ヒテ</sup>言<sup>ニ</sup>仁<sup>ト</sup>与<sup>ニ</sup>孝<sup>ヲ</sup>而<sup>ニ</sup>二<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>皆<sup>ラ</sup>自<sup>ラ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>ル</sup>敏<sup>ナラ</sup>其<sup>ノ</sup>

遜<sup>ナルコトそもそも</sup>抑<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>矣<sup>リ</sup>。回<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>仁<sup>しん</sup>・参<sup>しん</sup>之<sup>ニ</sup>孝<sup>モ</sup>三<sup>ニ</sup>千<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>徒<sup>タ</sup>未<sup>ダ</sup>能<sup>ハ</sup>或<sup>(注6)</sup>之<sup>ニ</sup>先<sup>さき</sup>焉<sup>ルコト</sup>。豈<sup>ニ</sup>

C

真<sup>ニ</sup>不<sup>ル</sup>敏<sup>ナラ</sup>者<sup>ナラン</sup>乎<sup>ナラ</sup>。

苟<sup>シクモ</sup>徒<sup>タダ</sup>為<sup>シテ</sup>二自<sup>ラ</sup>卑<sup>シムル</sup>一而不<sup>ル</sup>思<sup>ハ</sup>所<sup>コ</sup>以<sup>ヲ</sup>自<sup>ラ</sup>強<sup>ツト</sup>是<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>二知<sup>リテ</sup>退<sup>クラ</sup>而不知<sup>ラ</sup>進<sup>ム</sup>蓋<sup>シ</sup>

**I** 雖<sup>モ</sup>二美<sup>ト</sup>德<sup>ト</sup>然<sup>レドモ</sup>必<sup>ズ</sup> **II** 則<sup>チ</sup>有<sup>リ</sup>功<sup>コ</sup>由<sup>リテ</sup>是<sup>ニ</sup>言<sup>ハバ</sup>之<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>為<sup>ス</sup>学<sup>ヲ</sup>之道<sup>ダ</sup>所<sup>ハ</sup>重<sup>ンズル</sup>尤<sup>モ</sup>

在<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup> **III** 也<sup>ニ</sup>。

(黄潜『金華黄先生文集』による)

(注) 1 六経——『易经』『書経』『詩経』などの六つの「経書」。孔子に始まる儒家が尊重する古典。

2 武丁之命<sup>いん</sup>説——殷<sup>いん</sup>の王である武丁が、臣下の傳説<sup>ふえつ</sup>に徳を修める方法を答えるよう命じたことを指す。このとき傳説は「遜<sup>えつめい</sup>」  
「敏<sup>えつめい</sup>」二つの言葉を使つて答えた(『書経』説命篇)。

3 我非<sup>じゆじ</sup>生而知<sup>レ</sup>之者——『論語』述而篇に見える孔子の言葉。

4 好<sup>レ</sup>古、敏以求<sup>レ</sup>之者——『論語』述而篇に見える孔子の言葉。

5 顔・曾——孔子の弟子である顔回と曾参<sup>そうしん</sup>のこと。

6 或——ここでは「有」に同じ。

問1 傍線部(1)「偏」・(2)「所以」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

29

30

(1)

29 「偏」

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 片方だけ みだりに 安易に 全面的に 区別して

(2)

30 「所以」

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 目的 方法 能力 行為 場所

問2 傍線部A「遜者欲其謙退而如有所不能。敏者欲其進修而如有所不及」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

① 「遜」とは、自分は謙虚でありたいと思うのだが、とうていそれができそうにないと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学びたいのだが、そのことを言わないほうがいいようだと考えることである。

② 「遜」とは、自分は謙虚であろうとしているが、なおそれができていないようだと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学ぼうとしているが、なおそれが不十分であるようだと考えることである。

③ 「遜」とは、自分は謙虚でありたいと思うのだが、それでは人に対抗できそうにないと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学びたいのだが、それでも人に及ばないようだと考えることである。

④ 「遜」とは、自分は謙虚であろうとしているが、時にはそれが不必要なこともあるようだと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学ぼうとしているが、時にはそれが無意味であるようだと考えることである。

⑤ 「遜」とは、自分は謙虚であろうとしているが、実際にはその能力が全くないようだと考えることである。「敏」とは、自分は進んで学ぼうとしているが、実際にはその才能が全くないようだと考えることである。

問3 傍線部B「則其求<sup>レ</sup>之也、曷嘗不<sup>レ</sup>貴<sup>ニ</sup>於敏<sup>一</sup>乎」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、次の

各群の①、⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 32・33。

(i) 書き下し文

32

- ① 則ち其の之を求むるなり、曷<sup>なん</sup>ぞ嘗て敏より貴ばざらんや
- ② 則ち其の之を求むるなり、曷ぞ嘗て敏を貴ばざるや
- ③ 則ち其の之を求むるや、曷ぞ嘗て敏より貴ばざるや
- ④ 則ち其の之を求むるや、曷ぞ嘗て敏を貴ばざらんや
- ⑤ 則ち其の之を求むるや、曷ぞ嘗て敏に貴ばれざらんや

(ii)

解釈

33

- ① そうだとすると、孔子が古<sup>いにしえ</sup>の教えを追求するに当たって、どうして「敏」により貴ばれなかったことがあろうか。
- ② それだからこそ、孔子は古の教えを追求したのであるが、どうして「敏」よりも貴ばなかったことがあろうか。
- ③ そうだとすると、孔子が古の教えを追求するに当たって、どうして「敏」を貴ばなかったことがあろうか。
- ④ それだからこそ、孔子は古の教えを追求したのであるが、なぜ「敏」を貴ばなかったのであろうか。
- ⑤ そうだとすると、孔子が古の教えを追求するに当たって、なぜ「敏」よりも貴ばなかったのであろうか。

問4 傍線部C「豈真不敏者乎」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 顔回は「仁」に対して、曾参は「孝」に対して、みずからは「敏」でないとはいいつつも、実際は他の三千の弟子たちよりも「敏」である態度で取り組んだから。
- ② 顔回は「仁」に対して、曾参は「孝」に対して、孔子の教えを忠実に守って、実際に他の三千の弟子たち以上に「遜」である態度で取り組んだから。
- ③ 孔子は、顔回と曾参が「敏」でないため、顔回には「仁」に対して、曾参には「孝」に対して、他の三千の弟子たちよりも「遜」である態度で取り組むように指導したから。
- ④ 孔子は、顔回には「仁」に対して、曾参には「孝」に対して、他の三千の弟子たちに対するのと同様に「敏」である態度で取り組むよう指導したから。
- ⑤ 顔回と曾参は、孔子の「古を好む」考えに対しては「遜」であったが、「仁」と「孝」とに対しては他の三千の弟子たちよりも「敏」である態度で取り組んだから。

問5

空欄

35

I

II

III

に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

⑤	④	③	②	①
I	I	I	I	I
遜 <sub>ハ</sub>	遜 <sub>ハ</sub>	敏 <sub>ハ</sub>	遜 <sub>ハ</sub>	敏 <sub>ハ</sub>
II	II	II	II	II
敏 <sub>ナラバ</sub>	敏 <sub>ナラバ</sub>	遜 <sub>ナラバ</sub>	遜 <sub>ナラバ</sub>	敏 <sub>ナラバ</sub>
III	III	III	III	III
敏 <sub>ニ</sub>	遜 <sub>ニ</sub>	遜 <sub>ニ</sub>	敏 <sub>ニ</sub>	遜 <sub>ニ</sub>



問 6

この文章の(i)構成・(ii)筆者の意図についての説明として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 36 ・ 37。

(i) 構成

36

- ① 第一段落は本論の主題となる語についての定義付け、第二段落はその言葉を具体的に実践した歴史上の人物の例、第三段落は筆者自身の見解という展開になっている。
- ② 第一段落は本論の主題となる語についての経典による権威付け、第二段落は聖人の言葉による補強、第三段落は筆者の社会的通念への批判という展開になっている。
- ③ 第一段落は本論の主題となる語についての筆者自身の見解、第二段落は儒家思想家一般の見解、第三段落は筆者自身の見解の優越性の主張という展開になっている。
- ④ 第一段落は本論の主題となる語についての太古の時代における認識、第二段落は孔子の時代における認識、第三段落は筆者の時代における認識という展開になっている。
- ⑤ 第一段落は本論の主題となる語についての出典確認、第二段落はそれに対する思想史上の対立点の明示、第三段落は筆者から読者への問題提起という展開になっている。

(ii) 筆者の意図

37

- ① 学問をするには、書物を熟読し人の話によく耳を傾けることが大切である。効率的に行動すればさらによい。
- ② 学問をするには、自己中心的な先入観を捨てることが大切である。他者の意見をよく聞かなければならない。
- ③ 学問をするには、客観的に自己を見つめることが大切である。自分でうぬばれたり卑下したりしない方がよい。
- ④ 学問をするには、みずから能動的に努力することが大切である。人の教えを受け入れているだけでは進歩しない。
- ⑤ 学問をするには、最も有意義なものを見つげ出すことが大切である。そのためには対話や議論が欠かせない。